

書教育の現状について

○司会進行

修士課程 幸 喜 洋 人

○パネラー

中国

書道学科四年 林 雲 峰

書道学科四年 薛 中 超

韓国

修士課程 金 周 會

博士課程前期 吳 旻 俊

台湾

博士課程後期 黄 華 源

日本

修士課程 藤 田 尚 美

修士課程 藤 森 大 雅

中国における書教育の現状

林 雲 峰

中国における書教育は、小、中学校から行われるのだが、地域や指導者によって多少異なるところがある。ここでは、私自身が体験したことのみを記したいと思う。

① 中国の小学校

中国の小学校では、毎日習字の時間が10分間設けられており、硬筆と毛筆の両方を行う。このときに習うのは活字の手本を用いて行う。その他に「興味クラス」というものがあり、古典作品の勉強を中心として行われる。書体は、篆、隸、草、真、行の五体で、紙の大きさは日本と異なり半紙を用いず、半切から全紙までの大きさを使用する。このときの注意点は、形の整った美しい書を目指すよう指導される。この「興味クラス」で書かれたものは、前、後期の終わる際に「興味クラス成果展」として展示される。

② 中国の中学校

中国の中学校では、書法に関する科目は設置されていないため、これらを学びたい中学生及び小学生は、「幼年宮」「少年宮」「青年宮」などの書画院に入会する。そこで、学校よりもレベルの高い書法の専門的知識を身につける。そこでの指導者は専門の書家で、書法に関する設備も整っている。これらの書画院に通う生徒は、知識や技術の向上を目指すほかに、書法展の褒賞を目標に学ぶ人も大勢いる。

- ③ 中国の書法を学ぶ特徴 中国の学生の学習方法は、古典を忠実に学び、臨書をする際に古典とその作者の世界に入り込み、「形」と「神」を重んじる。例えば、董其昌の作品を臨書する際にその作品の「神」、即ち禅意があり、婉雅で秀麗という特徴を汲み取らなくてはならないということである。
- 以上、このような考え方で、中国の学生は書法を捉え学んでいる。

海外書教育の現状について

薛 中 超

中国において、書道の教育課程を設けている大学は、「芸術型」、「師範型」、「総合型」のほぼ三類型に分けられる。

芸術型——杭州 中国美术学院書法系（書道学科）

中国美术学院の書法系は造型学院に属し、中国書道、篆刻芸術の研究、作品制作を専攻内容としている。

中国国内の大学・高等専門学校で最初に（一九六三年七月）創立した書道専門学科である。この学科は「書道篆刻の創作」「書道理論の研究」「書道教育の研究」という三つの専門的方向性がある。

書道学科教育の主要な目標は、文学、歴史と造型の基礎の育成を備え、書道、篆刻創作などの実践能力を高め、理論的な研究能力と書道鑑賞能力を兼ね備えた専門的人材を育てることである。

生徒数・在籍生一一七名。その内、本科生一〇三名。大学院生六名。博士八名。

教師の概況・教師九人中、教授五名。助教授三名。講師一名。

書道学科主要な課程・篆書、隸書、楷書、行書、草書、古璽、漢印、流派印、古代文字学、古文、中国絵画史、中国書道史、印史、金石学、書論、歴代印論など。

師範型——北京 首都師範大学 中国書法文化研究所

師範型は、中学・高校・大学・専門学校など書道の教員を養成することを目的とした大学で、ほとんどが教育系大学である。

師範型大学では、文化学、芸術学、文字学の基本知識と基本理論を学び、中国文化史、中国文字史、中国芸術史を広範な範囲で理解できる。中国書道発展史、中国書道理論史、漢字字形と書体理論、中国書道文化理論を研鑽し、書道の作品に対して強い鑑賞能力を養う。書の創作方面においても、高いレベルにあり、中国の詩、詞、曲の対聯の創作能力も育成している。

大学院生の課程（一九九一年設立）

字体書体の研究 古代文字学の研究 書学雑誌 古代書論研究

書道史研究 詩詞曲と韻律の研究 美術芸術学の研究

中国文化研究博士の課程（一九九八年設立）

科学研究方法論 漢字字体と書体の研究 中国書法と文化の研究

総合型——北京大学 書法芸術研究所

北京大学の書法芸術研究所は二〇〇三年十一月に設立。北京大学の資源と学術の優位を利用して、同時に国内外の有名な学者と書家を吸収し、書道理論、書道教育、書道作品、篆刻芸術教育の研究を行う。国内外の書道界と積極的交流活動を深めて展開し、長所を取り入れて短所を補い、技能の練磨に努め、レベルが高い書道研究と書法創作の人材を育成する。我が国の書道芸術事業の発展、中華民族の輝かしい伝統的な文化を受け継ぎ、特に二〇〇四年に第一期の書法芸術研究大学院生の研修班を創設した。

書道専門の大学院生は、書道を学んで書くだけではなく、考古学部、中国語学部、哲学部、歴史学部など、書道との関連している専門の課程を履修しなければならない。全面的に中国書道文化の源流を探求し、書道の専門学術知識を高める。

研究所は北京大学出身の書家、書道理論家を招聘し、また、国内外の有名な書家、書道理論家、篆刻家を非常勤講師や客員教授として、大学院生の書道専門の文化修養を高めることに努めている。

北京大学が書道の専門の修士、博士を募集するのは現代の中国書道文化、学術レベルを高上させ、世界に向かって漢字の文化を広く宣伝するためである。

北京大学の書道修士のカリキュラム

必修科目（五科目 履修十五単位）

東洋と西洋の文芸美学（三単位）、東方書法の美学（三単位）、伝統文化と中国書道（三単位）、中国書道と他の文化の関係（三単位）、グローバル化と中国書道文化の輸出（三単位）

選択科目（五〜七科目 履修十五単位）

書道批評学と創作（三単位）、中国書道の文化思想の発展史（三単位）、近代書道の発展と問題（三単位）、現代の書道文化最前線の特別研究（三単位）、海外書道の現状と文化の対話（三単位）、考古学、文字学と中国書道（三単位）、

書画鑑定と審美賞析（三単位）

大 学	中国美術学院書法系	首都師範大学中国書法文化芸術研究所	北京大学書法研究所
類 型	芸術型	師範型	総合型
教育目標	芸術家	教員	学者
内 容	書道芸術創作	書道教育理論	書道文化研究
学 位	学士 修士 博士	修士 博士	修士 博士

書教育の現状について―韓国の初等学校・中学校・高等学校― 金 周 會

(1) 教育年限 初等学校（小学校）六年、中学校三年、高等学校三年

(2) 書芸科目 初等学校・美術科目の中に書芸が含まれている。

中学校・高等学校：正規（必修）科目ではなく、学校によって「特技適性教育」の中に設けられている。例、美術（書芸）、音楽、体育など。

(3) 書芸教育 初等学校：美術科目の授業で年に二〜三回行う。ただし、「書き方」（一〜六学年）という科目がある。筆記具は筆ではなく、硬筆を用いてハングルを正しくきれいに書くことが目的。「書き方」は日本の「書写」とは異なる。

*漢字学習：年に二回行われている漢字検定試験（九〜一級）に備えて、一般の学習塾で漢字を習う。
中学校：特技適性教育の中で書芸を選んだ学校のみが、少人数に指導する。

*漢字学習：「漢文」という正規科目で学ぶ。
高等学校：中学校と同様。

*大学進学：特技適性教育を受けた学生の中から大学の書芸学科に進む例が多い。

(4) 書芸教科書 初等学校：美術（書芸を含む）

中学校・高等学校：第七次書芸教科書検定実施以来、第八次は今現在行われていない。特技適性教育を設けている学校を除いて、一般の学校では授業が行われていないし、教科書も使わない。

(5) 書芸実技学習（初等・中・高等学校） 一般書芸塾に通う。

学生公募展（地域的規模・全国的規模）

学生揮毫大会（ ）

(6) 書芸教育内容（初等・中・高等学校） ハングル・四つの書体がある。

①板本体（篆隸書）、②宮体（正字Ⅱ楷書）、③宮体（くずしⅡ行書）、④宮体（真くずしⅡ草書）。
漢字・篆書・隸書・楷書・行書・草書。（鑑賞の対象も含む）

書教育の現状について—韓国の大学—

呉 旻 俊

韓国の大学の書教育は書芸科が創設する以前と以後で分かれている。書芸科が新設する前（一九八九年）の大学の書教育は、教育大学と師範大学を中心に書道の理論と実技を行い、一般の大学では教養科目として書道を取り入れた。また、大学のサークルで書道教育を行っている。

圓光大学は一九八九年、東洋伝統文化を継承して、書道の学問的体系と芸術的土壌を目指し、四〇名を定員で書芸科を創設した。現在、六つの大学（私立）に書芸科が創設されている。書芸科がある韓国の大学をまとめると次のようになる。

	学部 (大学)	科目選択	教学内容	教学特色	教学時数	養成人材	学位	創設年代
大田 大学	文科大学	必修選択 兼修	学問、 芸術	臨模と創作段階 伝統と書文化創造	半期型、学 年別段階	書作家、書 学研究者	学士 修士	一九九八年
湖南 大学	美術学部	必修選択 兼修	学問、 芸術	臨模と創作段階 伝統と書芸術	半期型、学 年別段階	書作家、書 学研究者	学士 修士	一九九九年
京畿 大学	美術学部	必修選択 兼修	学問、 芸術	臨模と創作段階 伝統と世界文化	半期型、学 年別段階	書作家	学士 修士	二〇〇三年

圓光 大学	純粹美術 学部	必修選択 兼修	学問芸術	臨模と創作段階伝統 と芸術文化	半期型学年 別段階	書作家書学 研究者	学士 修士	一九八九年
啓明 大学	美術学部	必修選択 兼修	学問芸術	臨模と創作段階伝統 と書芸術	半期型学 年別段階	書作家書学 研究者	学士 修士	一九九二年
大邱 大学	美術大学	必修選択 兼修	学問芸術	臨模と創作段階書文 化独創性	半期型学 年別段階	書作家	学士	一九九五年

カリキュラム(圓光大学)

必須科目

実技……基礎書芸、漢文、四君子、文人画、篆書、ハングル宮体、書芸とコンピュータ
理論……書芸概論、文字学、書論講読、書芸材料学、芸術哲学、中国書芸史、韓国書芸史

選択科目

実技……篆書、隸書、行書、楷書、草書、文人画、応用書芸、篆刻(ハングル・漢字)、ハングル書芸創作、板本民体
(ハングル)、文人画創作、篆刻創作

理論……書芸名作鑑賞、書芸批評、金石学、日本書芸史、作家論、韓国碑帖研究、漢文講読

書芸科の内にあるサークル(圓光大学)

文人画―四君子及び文人画を演習、編集部―學術紙(墨舟)を発刊(年一回)、圓光書芸学会―學術研究、文正会―漢学研
究、圓光古典漢文講読会―漢文原典を勉強、筆ソリ―ハングル書体研究、書体フォント開発、商品開発、探古会―拓本、
篆刻、金石学を研究、書芸史研究会―韓国・中国書芸史を研究、西舟同人―卒業生

書芸科卒業後の進路

書道講師―小・中等学校、公共機関、企業体、文化センター、書塾経営及び講師、研究員―博物館・美術館での書芸研
究員、進学―大学院、留学(中国、台湾、日本、ドイツ、米国など)、その他―文字グラフィックデザイナー、書道雑誌
の記者

以上、簡単に韓国の大学書教育の現状について言及した。各大学のカリキュラムと書芸科内にあるサークルは似通って

いるので圓光大学のものを参考にした。

各大学の書芸科は書芸専攻者も教職を履修できなかったため、一九九六年以後、美術大学書芸科から学部書芸専攻に名称が変わったが、書芸専攻者の教職履修はできなかった。しかし、卒業者は小・中等学校での書芸講師をすることができた。

既存の書教育は私塾の關係である。大学に書芸科が創設される前の教育は専門的ではなく、教養・趣味にすぎなかった。大学で書芸科が設立されてからは、書道の全般的な理論と実技を、様々な先生に幅広く習うことができるようになった。その結果、実技は勿論、理論まで兼備する専門書芸家がたくさん輩出され、質的・量的にも発展したと思う。しかし、まだ書芸科卒業後の就職問題と公募展、爲主の書作家の登用など解消するべき問題が残されていると思う。また、多くの国家との活発な交流を通じて、もっと幅広い視野をもつ展開を希望する。

大学教育における台湾書道について

黄 華 源

一九九五年台湾文部省は「専門学校を技術学院（専門学校付属）に変更する際の選択方法」を制定してから、二〇〇四年国立台北科技大学の建学により、八年間で国立専門学校十二校、私立専門学校四九校、合わせて六一校の専門学校が学院に校名変更された。台湾の芸術大学もその間で変更された。大学教育における書道の教育の現状を以下の五つの点から説明しようと思う。

1、**芸術専門大学** 現在、台湾の芸術専門大学は三校ある。その中で書道教育と最も関連があるのは、二〇〇二年に創設された国立台湾芸術大学である。もと美術学科の国画組を新しく書画芸術学科にした。これは伝統的な書道、篆刻の専門的、学術的な教育に一步近づいた発展である。

2、**一般の大学におけるの芸術学科** 芸術大学が成立する前に、芸術学科は大学におけるの書道教育には重要な存在であった。例えば、歴史の長い中国文化美術学科や新しい華梵大学美術学科などがある。

3、**師範学院系統におけるの美術、工作学科** 師範学院系統の美術学科と工作学科は教師養成の役割を担っていた。現在の教師養成制度は、師範学院系統のみに頼らず、各学校の伝統に沿っており、発展の方向も様々である。

4、**一般的な大学の文学歴史研究** 中国文学科が設置されてある学校は長い間、書道教育促進に大きな力をいれている。例えば、明道管理学院は国学大学院の下に中国文学組及び書道芸術組を設置している。それは台湾の大学院で、唯一書

道という名を冠した学科である。淡江大学の文鑑センターの下にも書道研究室が設置してある。これもほかの大学では見られない組織である。また、国立台湾大学芸術歴史大学院も学術研究の上で注目されている。

5、大学の書道クラブ 書道クラブの全面的な設置は書道教育の促進にとって大きな意義をもつ。クラブの設置によって、法、商、工、理学部の学生も書道に接触するチャンスがあり、素人の書道愛好者にも大きな影響がある。非芸術学科出身の名家から見てもわかるように、書道クラブは書道界で大きな存在を占めている。

結語

芸術大学における書道教育は専門的な学習ができる。但し、文学、歴史、哲学などの講義は、芸術の直接的内容に集中しすぎ、学生の人的素養の養成にかなりの制限があった。今年から台湾芸術大学は、学生が他大学の単位を履修することを認めるようになった。明道、華梵などの一般的な大学の美術学科では、学内の資源を有効利用した。それは専門的な学習の一方、人間的素養の養成も充実させるという方法である。学生はよりいっそう学内外の学習環境を利用することにより、意義深い教学発展を生み出すことであろう。

日本の小・中学校における書写教育の現状について

藤田尚美

1、小・中学校の書写教育の変遷

1、1 平成10年の学習指導要領の改訂点

平成10年度に書写の学習指導要領が変わった。平成元年度との比較を行ったものが、1、1の表(左)である。大きな違いとしては、中学1年を除いた、小学校と中学校の他の学年は、2学年ずつ同じ指導内容が示されるようになったことである。しかしながら、学習すべき項目が減ったのではなく、まとめられたと捉えて良いようだ。この2年計画の方式をとることにより、2年連続で授業計画が組めるため、1年目でできなかった分を2年目にやるといふ、補い合いができるようになった。反面、重複や欠如という危険性もある。

1、2 書写の指導時間数について

小学校では、平成元年度では35時間程度とされていたが、平成10年の変更により、第3学年・4学年の国語が235時

間、第5学年180時間、第6学年175時間に対し、書写の指導に配当する授業時間数は、各学年30単位時間程度となった。これは、週5日制や総合的な学習の時間などによる影響があったと考えられる。中学校においては、第1学年の国語科が140時間に対して、10分の2程度、第2・3学年が105時間に対して10分の1程度が書写に配当されている。しかし、実際は、高校受験による圧力で、授業が削減される傾向にある。特に2・3学年においては、なおのこと、それが言える。

2、書写教育の指導目的

2、1 書写教育の目的と方向性

・教材のねらいの明確化

ねらいとは「点画の接し方」「文字と文字の組み合わせ」といったものをさしている。ついつい授業では、教材となる言葉だけを懸命にし、完成させようという方向性が強く、「なぜこの文字を書いているか？」の理解がうすいようである。ひとつの言葉にこだわらず、他の言葉にも目を向け、ねらいを明確化することが必要である。あくまで、課題の文字を書き、字形を知ることが通過点にすぎず、文章表現が書写の目的であることを常に考え、進めることが大切であろう。

・毛筆・硬筆関連指導へ

書写を日常化へ方向づける大事な動きとしては、硬筆へ転化することがあげられる。書写は国語科に付随しているものであり、毛筆によつて大きく文字の点画・筆遣いを学んだ後は、日常で活きるように、硬筆でも書いていく必要がある。また、硬筆を使用することにより、文章の中で文字意識を高めたり、日常身の回りにある用具用材にも目を向けたりできる。授業の中で、手紙を書いたり、簡単な書類を書いてみたりすると、より日常に活きてくると思う。しかしながら、授業時間が少なく、なかなかそこまでいけないのが現実であろう。

2、2 中学校教育における速書き（行書）指導の欠如について

・速書き（行書）指導の効果と重要性

中学の書写では、高校受験に圧され、授業が十分にもつことができないケースが増えている。そのため本来学ぶべき「速く書く」という中学校の目標が達成できずにいるのが現実であるようだ。行書を習うことは、許容範囲の文字の理解ができ、様々な文字の形を知り、書く上での選択肢が増える。また、速く書くことで、学習能力が上がり学習能力にも関係してくるとされている。速く書くことは、学問との関連があることを認識し、取り組むべきである。

3、書写指導をする立場から

3、1 国語科書写と芸術科書道の指導の相違点

簡単に言えば、「用」の側面を重視するか「美」の側面を重視するか、ということになると思う。つまり、小・中学校において、「正しく・整えて」と指導要領に書かれている。これらが意味することは、文字言語のツールとして「読みやすく」、皆の共通言語として「理解しやすい」状態の形を指しており、実的に生きる文字を指している。一方「美」の面を重視する高校の指導は、歴史的背景から見て、様々な表現法を知り、美を意識し、自己を投影する手段として、文字を扱うようになる。しかしながら、高校1年の指導要領の中には、「書写能力を高め……」という記述があるように、芸術科書道への導入時は、書写を基礎にしたうえで進めていく必要があるように思われる。このことからわかるように、小・中学の書写の授業を重要視する必要がある。

3、2 授業の工夫

・グループ学習

従来の書写の授業は、お手本が配られて、それに近づくように各個人が取り組む方法をとってきたようである。しかし現在では、グループをつくり「整えて書くためにはどうしたらよいか？」を考えさせ話し合い、思考しながら能力の向上に力を入れるようになってきているようだ。また、友達同士で、授業の評価をし合い、お互いに励ましあいながら向上する方法をとるようになってきている。

・書写水書板の活用

現在多くの学校で、水書コーナーを教室の一部に設け、練習をしているようである。書いても乾けば、文字がすぐに消えてしまうこともあり、半紙の時にはないような、思い切りのある字を書いてみたり、紙を何枚も使用せず試して書いたりできる点が良いと感じる。

・練習用紙の作成

現在主流になりつつあるのが、練習用紙を各自が作成し、それを利用する方法である。作成する際に、紙に対する大きさ、全体の形・点画の高さ・筆圧などが早く習得できる利点がある。短時間で字形を理解しやすく、授業時間数が少ない中で効率よくやるには良い方法であるが、籠^{かご}字の場合は塗ってしまう場合もあり、注意したい。

・組立て文字の活用

表 1. 1 学習指導要領の新旧比較表

新 学習指導要領(平成10年)	旧 学習指導要領(平成元年)	
小学校 1・2 年	小学校 1 年	小学校 2 年
(ア) 姿勢や用具の持ち方を正しくして丁寧に書くこと。	(ア) 姿勢や用具の持ち方を正しくして書くこと。	(ア) 姿勢や用具の持ち方を正しくして書くこと。
(イ) 点画の長短、接し方や交わり方などに注意して、筆順に従って正しく書くこと。	(イ) 文字の形に注意して、筆順に従って丁寧に書くこと。	(イ) 文字の形に注意して、筆順に従って丁寧に書くこと。
	(ウ) 点画の長短、方向などに注意して、文字を正しく書くこと。	(ウ) 点画の接し方、交わり方、方向などに注意して文字を正しく書くこと。
小学校 3・4 年	小学校 3 年	小学校 4 年
(ア) 文字の組み立て方に注意して、文字の形を整えて書くこと。	(ア) 姿勢や用具の持ち方に注意して、筆順に従って文字を書くこと。	(ア) 文字の組み立て方に注意して、文字の形を整えて書くこと。
(イ) 文字の大きさや配列に注意して書くこと。	(イ) 文字の組み立て方に注意して、文字の形を整えて書くこと。	(イ) 文字の大きさや配列に注意して読みやすく書くこと。
(ウ) 毛筆を使用して、点画の筆使いや文字の組み立て方に注意しながら、文字の形を整えて書くこと。	(ウ) 毛筆を使用して、点画の始筆、送筆(おれ、曲がりなど)、終筆(とめ、はね及びはらい)などの筆使いに注意しながら、文字を丁寧に書くこと。	(ウ) 毛筆を使用して点画の接し方、交わり方、方向などの注意しながら、文字を正しく書くこと。
	(エ) 毛筆を使用して、点画の長短、方向などに注意しながら、文字を正しく書くこと	(エ) 毛筆を使用して、文字の中心、画と画との間などに注意しながら、文字の形を整えて書くこと。
小学校 5・6 年	小学校 5 年	小学校 6 年
(ア) 文字の形、大きさ、配列などを理解して、読みやすく書くこと。	(ア) 書かれた文字の形、大きさ、配列などのよしあしを見分け、文字を書くときに役立てること。	(ア) 文字の形、大きさ、配列などを理解して書くこと。
(イ) 毛筆を使用して、点画の筆使いや文字の組み立て方を理解しながら、文字の形を整えて書くこと。	(イ) 毛筆を使用して、文字の組み立て方に注意しながら、文字の形を整えて書くこと。	(イ) 毛筆を使用して、文字の組み立て方を理解しながら、文字の形を整えて書くこと。
(ウ) 毛筆を使用して、字配りよく書くこと。	(ウ) 毛筆を使用して、文字の大きさなどに注意しながら、字配りよく書くこと。	(ウ) 毛筆を使用して、文字の大きさなどに注意しながら、字配りよく書くこと。
中学校 1 年	中学校 1 年	
(ア) 文字を整え、文字の大きさ、配列・配置に気をつけて書くこと。	(ア) 文字を整え、文字の大きさ、配列・配置に気をつけて書くこと。	
(イ) 漢字の楷書とそれに調和した仮名に注意して書き、漢字の行書の基礎的な書き方を理解して書くこと。	(イ) 漢字の楷書とそれに調和した仮名に注意して書き、漢字の行書の基礎的な書き方を理解して書くこと。	
中学校 2・3 年	中学校 2 年	中学校 3 年
(ア) 字形、文字の大きさ、配列・配置などに配慮し、目的や必要に応じて調和よく書くこと。	(ア) 字形、文字の大きさ、配列・配置などの適不適を判断して、効果的に書くこと。	(ア) 目的や必要に応じて適切な形式や文字の書き方を考え、調和よく書くとともに、書写された文字の形、配列・配置の調和などについて理解を深めること。
(イ) 漢字の楷書や行書とそれらに調和した仮名の書き方を理解して書くとともに、読みやすく速く書くこと。	(イ) 漢字の楷書や行書とそれらに調和した仮名の書き方を理解して書くこと。	(イ) 漢字の楷書や行書とそれらに調和した仮名に書き慣れて、読みやすく速く書くこと。

これは主に「組立て」をねらいとする教材の時に活用する。この方法をとることにより、文字と文字の間隔や高さなどが変えられるため、整っていると思われる位置をさまざまに工夫し、見つけることができる。これも現在では、コーナーとして教室に設置している。

・情報機器の活用

まだ情報機器を活用するところは数少ないが、書道C A Iなどの教育ソフトが充実しつつある。現在では、授業時間の短縮にもなう対策がとられ、一方向になってしまいがちな書写の授業を、生徒が進んで参加できるように方法がとられている。ここでは5点とりあげたが、実際各教育現場で、様々な工夫がなされている。

4、書写教育の果たす役割と課題

以上現状を述べたが、やはり書写教育において大事なところは、文字の基礎基本を習得させ、そして日常化させていくことにあると思う。近年、書写能力が招く影響として、学習能力や学習意欲といったものがあげられている。子どもが文字を書く上での、基本を身につけるためにも、書写が重要な役割を担っている。

情報化が進むにつれ、「文字を手書きする」ということが失われつつある。「何のために書くか」に対し、「他者のため」と「自己のため」の両面から考えていくことが大切であるようだ。つまり「伝達・記録のために書く」という面と「定着・認識のために書く」という面のことをさしている。このことを考えることで、小学校での「正しく・整えて」、また中学では、それに加えた「速く書く」という指導要領の目的の重要性がわかるかと思う。最近では、手で書くことによる良さを伝えていこうとする動きが活発にみられるようだ。

今後の書写書道の課題は、いかに社会の情報化と国際化の波に圧されずに存在するか、また、いかに手で書くことの必要性を説くことができるか、であろう。

【参考文献】

久米 公(1989)『書写書道教育要説』菅原書房

杉岡 華邨(1996)『書教育の理想』二玄社

全国書写書道教育学会(2002a)『書写指導』(中学校編)菅原書房

全国書写書道教育学会(2002b)『書写指導』(小学校編)菅原書房

全書研教育課程調査研究特別委員会（2001）『提言』全日本書写書道教育研究会
全書研教育課程調査研究特別委員会（2004）『提言Ⅱ』全日本書写書道教育研究会
宮澤 正明（2004）『これからの書写教育の方向性』書写書道教育講演会

「書写教育に関するサイト」

平成16年度 第36回 岡山県書写教育研究大会

『新しい書写の現状と対応』 <http://www.ken-syu-kyo.jp/kyosyo.htm>

『現代における行書の意義と解釈』 <http://www.shosha.kokugo.juen.ac.jp/~oshiki/ronbun/Gyosho&Gendai1998/>

『IT時代における文字を書くことの意義を考えてみませんか』 <http://www.soc.nii.ac.jp/jacse/Kiroku/2001Symposium/>

『書写の基礎知識―書写・書道・習字・書き方―』 http://www.shosha.kokugo.juen.ac.jp/oshiki/jyugyo/bridge1/x1_shosha/

日本の高等学校・大学における書教育に関する現状

藤 森 大 雅

高等学校

新学習指導要領の導入により、完全学校週5日制・総合的な学習の時間の創設・選択学習の幅の拡大等、教育現場では新たな試みが行われている。その結果、「書道」をはじめとする各教科の授業数が縮減している。さらに少子化にともなう生徒数の減少もあり、高等学校の芸術科「書道」を削除しようという動きがあるようである。また、芸術科に「書道」が設置されている高校でも、「書道」の教師が定年を迎える、或いは「書道」の教員が他校へ転勤する際、教員を専任ではなく講師にきりかえるといった実例が少なからずある。これらのことは高校教育の中で、日本の伝統である書を学ぶ環境と、書の文化を伝えていく教員の減少という危険性がある。

この流れとは反対に平成十二年以降、芸術科「書道」を、普通科の「書道」コースとして設置する高校や、「書道」を新設した高校がある。高校に「書道」を設置することは、他校との差別化を図り、その高校独自の特色を打ち出す

ことを目的としている。表に掲げた高等学校で行われている書教育の内容を、芸術選択「書道」と比較すると、各高校により多少の違いはあるものの、年間の単位数は多く、実技、理論の両面において細分化されていて、専門的に組まれている。高等学校の場で、高い知識と技術を学ぶことができるカリキュラムとなっている。

総合的に高等学校の書教育は時間数、教員数の削減という傾向がありながら、その反面、教養として学ぶよりも専門的な技術、知識を学ぶ環境が増えつつあるという矛盾した状態だと言える。

表 平成十二年以降「書道」関連コース設置校（参考 文部科学省ホームページ <http://www.mext.go.jp/>）

設置年	高 校 名	内 容
平成十二年	高知県立岡豊高等学校（高知県）	芸術コース（書道コース） 定員若干名
平成十四年	興誠高等学校（静岡県）	書道コース 定員約二十名
平成十四年	浜松学芸高等学校（静岡県）	書道コース 定員約十五名
平成十六年	大分高等学校（大分県）	特別進学コース書道クラス 定員約二十名
平成十六年	熊本県立御船高等学校（熊本県）	普通科芸術コース書道 定員約十名

大 学

大学での書教育は、その大学がどのような教育課程で、どのような人材を育てることを目標にするかによって大きく異なる。一部の大学において、書がどの学部（学群）に属しているかを分類すると大きく三種に分けられる。

①「教育型」……東京学芸大学 教育学部教育系中等教育教員養成課程（B類）書道専攻

教育学部教育系芸術文化課程（G類）書道専攻
横浜国立大学 教育人間科学部学校教育課程国語・日本語教育講座

国立大学がほとんどで、小・中学校の国語科書写の教員、高等学校の芸術科書道の教員養成が目標の大学。
②「芸術型」……筑波大学 芸術専門学群美術専攻書道コース

日本では唯一、芸術家（書家）・研究家の養成を目的とした大学。

③「文学型」……大東文化大学 文学部書道学科

四国大学 文学部書道文化学科

私立大学がほとんどで、伝統的な文化、教養として書を学ぶことを目的とした大学。現在では①（教員養成）、②（書家・研究家養成）を兼ねる性格が強い。

ここにとりあげた大学以外の大学も、この三種のいずれかに分類できる。日本の大学における書教育は、大きく見れば書の文化を継承し、発展させる次世代の人材を育てることを目的としている。そして各大学の「教育型」、「芸術型」、「文学型」といった教育体制の違いは、その目的を達成するための手段といえる。

本学の書道学科の自由科目「書道文化演習2（海外）」では、二〇〇二年度から海外の大学で短期研修を行い、（二〇〇二年度中国杭州の「中国美術学院」、〇三年度、〇四年度は台湾板橋の「国立台湾芸術大学」、二〇〇四年度には国立台湾芸術大学と学術交流協定を結んでいる。これらは、見聞を高め、視野を広げる機会と、直接異なる文化に接することができる。今後の大学書教育の一つの方向として、漢字文化圏を中心とした海外との交流が期待される。

【参考文献】

- 河内利治著 「日本、中国、台湾の大学における書道教育の比較研究」二〇〇三年六月書道研究所「大東書道研究11」
文部科学省ホームページ <http://www.mext.go.jp/>
高知県立岡豊高等学校ホームページ <http://www.kochinet.ed.jp/oko-h/>
興誠高等学校ホームページ <http://www.szo-kosei-h.ed.jp/>
浜松学芸高等学校ホームページ <http://www.gakugei.ed.jp/>
大分高等学校ホームページ <http://www.oita-h.ed.jp/>
熊本県立御船高等学校ホームページ <http://www.higo.ed.jp/sh/mifunesh/>